

### 誰が語っているのか—メディア言説における 主体の問題—

鈴木, 正道

---

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

73

(発行年 / Year)

2009-01-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003622>

## 誰が語っているのか

— メディア言説における主体の問題 —

鈴木正道

### 0. 序

社会の様々な現象を批判の対象としていたマス・メディアが、批判の対象、さらには様々な角度からの研究の対象となつてから久しい。私は前々号で、日本の4つの全国紙に2006年8月16日に掲載された社説の言説分析を試みた。小泉首相（当時）が靖国神社を参拝した翌日の社説の構成、表現、引用の仕方と、その内容や新聞社の政治的立場との関連を考察した<sup>(1)</sup>。さらに前号で、社会現象を対象化するまなざしとしてのマス・メディアという観点から、批判的考察を試みた。新聞、雑誌、テレビなどが、メディア運営機関に勤務する人々、メディアに投稿、出演して意見を語る人々、メディアを受容する人々という重層的なまなざしを形成し、社会的関心、話題、問題の焦点とされるものを対象化するという趣旨である<sup>(2)</sup>。ただしまなざしの具現化としてのテキストの分析は別の機会に委ねた。まなざしを対象に注ぐ主体は、テキストにおいて語り手として発話する。今回は語り手に焦点を当てて、実際のマス・メディアのテキストを分析する。マス・メディアにおけるまなざしが、直接的な対話の場合と異なって、一方的に対象化する作用を持つのは、それが対象化されにくいからである。その理由として、マス・メディアにおいては、発信者と受容者の関係が基本的に一方向的であることに加えて、語り手の存在が見えにくいことが挙げられる。無署名の記事、語り手の存在を示す指標がありながら明確に語りを引き受ける主体が示されないテキストなど、誰が語っているのかがわかりにくいテキストは、マス・メディアの言説の特徴を成すと言える。私は本論において、語り手の指標という点から分類できる様々な新聞記事を対象として、語り手の存在の表現とテキストの効果について考える。

新聞記事に限定するのは、本論の規模から、すべてのメディアを扱うことはできないこと、また週刊誌やテレビに比べて縮刷版やインターネット版など保存された資料が手に入りやすいこと、また伝統的に読者が多く、さらに近年新聞社が学校教育で新聞を使うことを積極的に呼びかけるなど、社会的影響力が大きいことによる。勿論、参考として随時その他のメディアに言及することもある。なお、今回は社説に限らず、様々な部類の記事を扱うこともあり、『朝日新聞』、『読売新聞』および『毎日新聞』にその対象を限る。前者2紙は従来その政治的、社会的価値観において対照的であること、さらに最近『日本経済新聞』とともに、販売網を共同化する一方、記事を読み比べることのできるサイトを開いたこと<sup>(3)</sup>で競合的かつ協調的関係に入ったので、比較の題材として興味深いと私が判断するものである。それに対して、『毎日』は、従来販売部数が前者2紙のそれを下回り、また今回の3紙の提携に加わっていないこと、他方『朝日』との政治的、社会的価値観の類似を指摘されることから、独自の戦略を展開しようとしていると考えられ、私は比較の対象に加えた。本論ではレイアウトなどに関して印刷版を参考にする場合を除いて、インターネット版を参照する（『朝日新聞』は「聞蔵Ⅱ」、『読売新聞』は「ヨミダス文書館」、『毎日新聞』は「毎日 News パック」）。

まずテキストにおける語り手を、著者／執筆者との関係で位置づけ、さらにテキストによる語り手の位地の違いを言語学および文学の理論家の論に基づき考える。それから語り手の位地に従って分類された新聞記事を検討する。最後に語り手の位地が様々であるテキストが集まって日々形成される新聞がいかにそれ自体語り手となり、（権）力を発揮するかを考える。

## 1. 執筆者／著者と語り手

テキストには執筆者がいる。古代から伝わる物語には、執筆者が不明であったり、複数の人間が語り継いで次第に現在に伝わる形を作っていったものもある。それでも執筆者がいることには変わりはない。テキストを言えば外から編んだ人間が執筆者である。それに対して、語り手<sup>(4)</sup>とはテキストの中であって語りを請け負い、テキストを進行させる機能としての存在である。ある人間が自ら現実とみなすことをテキストにより伝えようとするとき、執筆者と語り手は一致すると考えられる。しかし創作作品において執筆者と語り手は異なる。

語り手は執筆者により創造され、脚色された存在である。『我輩は猫である』の「我輩」が夏目漱石でないのは勿論、『失われた時を求めて』の「私 <je>」はマルセル・ブルーストではない。

マス・メディアにおいて生産されるテキストではどうだろう。メディアのテキストが、「現実」を伝えることを使命とする限り、執筆者は語り手でもあるはずである。しかし日本のメディアにおいて記事の執筆者は多くの場合匿名である。社説のように、新聞社の代表的意見として掲げられ、かつ論説委員の合議によって内容が定められる場合、実質上書く人間は一人であっても、語り手は複数の人間を想定する。また編集担当者が手を入れる記事も多い。こうした状況において、執筆者と語り手は必ずしも一致しないと考えるべきである。言うまでもなくその乖離は記事によって異なる。本論では、執筆者と多かれ少なかれ距離を持った語り手が、いかにテキストを展開するかを検討する。

## 2. 物語と言説

フランスの言語学者エミール・バンヴェニストは、発話を物語／歴史 (histoire) と言説／談話 (discours) に分けた<sup>(5)</sup>。前者においては、語り手が名乗ることなく、また内容に一切介入することなしに、発話を進めていく。登場する人物は3人称で語られ、動詞は単純過去、半過去、大過去、予見未来<sup>(6)</sup>が用いられる。客観的視点が想定され、主観性を含む現在（歴史的現在は除く）、完了（複合過去）、未来は排除される。これに対して言説／談話は、「話し手と聞き手が想定され、何らかの形で前者が後者に影響を及ぼそうとする意図が想定されるあらゆる発話」<sup>(7)</sup>である。物語の語り書き言葉であるのに対して、言説の語りは、書き言葉および話し言葉である。言説においては、「私」と「あなた」を含めてすべての人称が自由に用いられる。動詞は、単純過去以外のすべての時制、特に現在、未来、完了が用いられる。現実の用法においては、物語と言説の間で絶えず転換が生じる。物語において、ある人物の会話が引用されれば、語りは言説に移ったことになる。

フランスの文学者ジェラルド・ジュネットは、言説の「主観性」および物語（ジュネットは《histoire》という言葉とともに《récit》という言葉を用いる）の「客観性」は言語学的な基準に基づいており、前者では、言説を担う「私」の存在が何らかの指標により示され、後者は、語り手への言及がないことによ

り定義されると、バンヴェニストの理論を説明して言う<sup>(8)</sup>。さらに彼は、物語および言説は純粋な状態ではまず存在しないとも言う。物語の中には常に、いくらかの言説の要素が、言説の中にはいくらかの物語の要素が入り込む<sup>(9)</sup>。あるいはむしろ、言説こそあらゆる形を含む可能性を持っているという意味で言語活動の「自然な」方式であるのに対して、物語は限定された条件のもとでのみ現れると言う意味で厳密な形では存在しない方式だと考えるべきである<sup>(10)</sup>。

言うまでもなく、フランス語と日本語では構造が大きく異なる。まず日本語では、単純過去と複合過去の文法的区別がないので、これを物語と言説を区別する指標に用いることはできない。また「終止形」が現在として用いられる点、未来が推定の助動詞（そもそもヨーロッパ言語の助動詞とは原理が異なる）によって担われるなど、時制の概念区分がフランス語とは大きく異なる。他方、日本語では主語を省略することが多い。しかしジュネットも述べているように、言説において「私」という代名詞が明示されているとは限らず、形容詞や副詞など、語り手の判断を示す表現によっても、その存在が示される<sup>(11)</sup>。日本語のテキストに関しても、「私」という単語の発現ばかりでなく、その他の指標に注目することが有益であろう。その意味で語り手とテキストとの関係という視点から、バンヴェニストの理論をもとに、日本語のメディア・テキストを考えることは有意義であるはずである。本論では、時制は指標には加えないこととする。「私は～した」という文は、過去の表現であるが、言うまでもなく言説に属するからである。他方、語り手としての「私」が主語として明示されているか、あるいはその他の指標を見出すことができるかを、主な考察の対象とする。

### 3. 言説としての記事

いわゆるニュース（英 news, 仏 actualités）、の名が示すように、現在起こりつつあること、生じたばかりのことで、その結果が現在に影響していることを扱う報道テキストは、まさに言説の領域に属するはずである。事実上、純粋に歴史／物語であるテキストは存在しないとして、とりわけ報道テキストは、歴史／物語である部分が少ない、もしくは多くの場合に中心をなさないテキストであると言えよう。その一方で、「客観報道」という、理念としてはともかく現実としてはもはや受け入れられない考え方は、語り手の存在を消し去った、

歴史／物語としての報道記事の生産を目指すものだと言える。実際、語り手の存在がどの程度感じられるかは、記事の部類により極めて異なり、メディア運営機関で働く人々は、多かれ少なかれ意識してそれを使い分けている。多用なメディアがしのぎを削る今日において、どれほど語り手を前に出すかが、重要な戦略になっているとも言える。本論では、語り手の存在が消された記事、つまり「客観性」を目指した記事、また逆に語り手を前面に出した記事、いわば「記者の息遣いを感じさせる記事」、あるいはその中間に様々な度合いの違いとともに分類されるべき記事を検証し、それらを読み手がいかに受け取るかを考える。あらゆるテキストが基本的に言説である中で、語り手として読み手に「影響を及ぼそうとする意図が想定される」報道テキストという言説において、物語であることを目指すことも多いということがどのような意味を持つのかを考えることが必要である。

### 3.1 語り手の見えない記事

歴史／物語と言説／談話を両極として、その中間の様々な度合いを考えた軸において、最も物語に近い新聞記事を考えよう。1面に掲載される記事である。以下は福田首相が辞意を表明した夜の翌日に出た朝刊1面のトップ記事の見出しと前文である。

『朝日新聞』2008年9月2日朝刊1頁：

**福田首相辞任 2代続け政権放棄 後継選び、麻生氏軸 国会運営、展望開けず**

福田首相は1日夜、首相官邸で緊急に記者会見し、「新しい布陣の下に政策の実現を図らなければいけない」と述べ、辞任の意向を表明した。衆院解散・総選挙の時期や、インド洋での給油継続のための補給支援特措法の延長などをめぐる公明党との対立に加え、対決姿勢を強める民主党との間で「ねじれ国会」を乗り切る展望が開けず、これ以上の政権維持は困難と判断した。安倍前首相に続き、2代続けて約1年で政権を放棄したことで、自公連立政権の行き詰まりが明確になった。自民党は後継を選ぶ総裁選に入るが、麻生太郎幹事長が軸になるとみられる。

『読売新聞』2008年9月2日東京朝刊1頁：

**福田首相退陣 政権浮揚、展望開けず 総裁選に麻生氏出馬へ＝号外も発行**  
 福田康夫首相（72）は1日午後9時半から、首相官邸で緊急記者会見を行い、退陣する意向を明らかにした。首相は、8月1日に内閣改造に踏み切ったが、内閣支持率の低迷から抜け出せず、政権浮揚の展望が開けなかった。自民党は近く総裁選を行い、後継総裁を選出する。麻生幹事長は2日未明、立候補の意向を党幹部に伝えた。党内には小池百合子・元防衛相らを推す声もある。与党は、新内閣の支持率などをみながら衆院解散・総選挙の時期を探ると見られ、今後の政局は解散含みの緊迫した展開となる。

『毎日新聞』2008年9月2日東京朝刊1頁：

**福田首相：退陣表明、緊急会見「新布陣で政策実現を」 後継、麻生氏が軸**  
 ◇就任1年

◇自民総裁選へ、今秋にも解散か

福田康夫首相は1日午後9時半から、首相官邸で緊急に記者会見し、「新しい布陣の下、政策実現を図るためにきょう辞任を決意した」と述べ、退陣する考えを正式に表明した。国会運営や衆院選の時期を巡って連立を組む公明党との亀裂が生じたことから、与党内の求心力が低下。民主党が攻勢を強める中で臨時国会を乗り切るのは困難と判断し、自らの退陣によって事態の打開を図ったものだ。昨年9月12日に安倍晋三首相（当時）が突然、辞任表明したのに続き、福田首相もわずか1年足らずで政権を投げ出す異常事態になった。[中田卓二]

『朝日』、『読売』のどちらにも署名がなく、また3紙とも語り手を示す代名詞がない。3紙とも、語り手の存在はほとんど感じられず、「出来事が自らを語っているように見える」<sup>(12)</sup>。その意味で極めて歴史／物語のテキストに近い「客観的な」記事だと言える。しかし語り手を示す指標はいくつかある。『朝日』と『読売』の見出しおよび前文で（同日の『毎日』では社会面で）、今後の政局運営の展望が開けなかった由が語られているが、実はこれは語り手がそのように判断しているわけである。『朝日』と『読売』の1面で述べられているから、多くの人が共有している見方だと考えることはできるが、語り手の判断であることに変わりはない。あるいは『朝日』の前文の「明確になった」、「～と

みられる」、『読売』の「～と見られ」という認識、「緊迫した展開」という評価、『毎日』の「亀裂が生じたことから、与党内の求心力が低下」という因果関係、「図ったものだ」という解釈、「わずか1年足らず」という数量に関する評価も語り手の判断を示している。

他方、3紙に明記されているように、この記事は記者会見をもとに書かれたものであり、従って記者会見に出席した記者、さらにはそれと前後して情報を収集した記者がいることを推測できる。記事の筆者と取材した記者が全く同一人物なのか、取材者のうちの1人が記事を書いたのかは読み手には分からない。しかしいずれにせよ「新しい布陣の下に政策の実現を図らなければいけない」（『朝日』）、もしくは「新しい布陣の下、政策実現を図るためにきょう辞任を決意した」（『毎日』）という首相の言葉、「麻生幹事長は2日未明、立候補の意向を党幹部に伝えた。党内には小池百合子・元防衛相らを推す声もある」という事実の開示（『読売』）は、記事の語り手の背後にいるはずの取材者が取材対象との間に言説を組み立てた結果である。その意味でこれらの記事における語り手の存在を読み手は感知することができる。

### 3.2 語り手の見える記事

興味深いことにこの日は、『朝日』『読売』『毎日』の3紙において、1面の左に署名入りの論説記事が載っている。『毎日』のトップ記事の署名が目立たないのに対して、これらの記事の署名と肩書きは見出しのすぐ下に掲げられていて目に付く。事実、本文には、執筆者としての語り手の存在がはっきりと感じられる。出だしの部分を見よう。

『朝日』：野党に譲って民意を問え 編集委員・星浩

1年前の安倍首相の辞任表明のリブレーを見ているかのようだ。安倍氏は自民党の若手を代表し、福田首相はベテラン・穏健派に推されたという違いはあったが、2人とも国政の難しい課題を抱えながら、あっさりと政權を放り投げてしまった。

「見ている」のは言うまでもなく筆者としての語り手、もしくは彼を含む記者団、さらには視聴者や読者、国民である。「あっさり」とも語り手の判断である。「しまった」という表現は単なる完了ではなく、遺憾、呆れなどの感情



を含むと考えられる。

『読売』：政治の責任自覚せよ 政治部長・赤座弘一<sup>(13)</sup>

またしても、政権が投げ出された。昨年の安倍前首相の辞任から1年もたっていない。舵取り役が次々と姿を消していく日本政治の混迷ぶりは国民をあきれ果てさせるだけでなく、国際社会の不安も増幅させる。

「またしても」は語り手の頻度評価を示す。「1年も」は語り手の数量評価を表わす。「混迷」も語り手の評価である。「混迷ぶり」が「国民をあきれ果てさせ」また「国際社会の不安も増幅させる」というのも語り手の予想である。多くの読者が彼と同じく考えるとしても、このような評価を下しているのが語り手であることに変わりがない。

『毎日』：信念なき政治の漂流＝政治部長・小松浩

「出処進退」。昨年9月の福田康夫政権発足以来、常に脳裏に浮かんでいたのは、福田氏が自民党総裁選の候補者討論会で、政治指導者にとって最も大事なことは何かと聞かれた際に答えた、この一言だった。福田首相に改めて聞きたい。出処進退とは、難局に当たって逃げ出すことだったのですか、と

「脳裏」とは語り手の「脳裏」である。「聞きたい」のは語り手であり、問いは聞き手である福田首相に向けられた形で表現されている。

3紙とも、書き出しの部分を読んだだけで、語り手が主体として言説を発しているのが分かる。トップ記事で、語り手の存在が筆者の意志とはかかわらずに感知されるのとは異なる。しかし3紙の論説記事において、ここで引用しなかった部分を含めた全体を通して、語り手を表わす「私」という代名詞は全く使われていない。それでも語り手を担う主体は名の掲げられた執筆者であることがはっきり分かるし、忠実な読者であれば、それぞれの執筆者が普段どのような記事を書いているかを思い出すだろう。

### 3.3 語り手が前面に出された記事

語り手がさらに前面に出された記事もある。記者が個人的に何を感じ考えているかを知りたいという近年の読者の要望に答えることを目指した企画だと考

えられる。しかし他方、執筆者の個人性を強調した記事を書き載せることで、従来型の報道記事を「客観報道」に徹した記事として読者に認めさせたいという意図が新聞社の社員にあるのではないだろうか。『毎日新聞』の「記者の目」や「男の家庭面」がこの種の記事の例である<sup>14)</sup>。前者では、ある報道記事を書いた記者が取材を通して考えたこと、個人的な意見であるがゆえにその記事の中では述べなかったことを伝える。執筆者の顔写真が名前と共に表題の下に掲げられる。後者では1人の記者が家庭人として行ったことを体験記として綴る。活動する執筆者の写真が本文の中に据えられる。いわば、前者では「公的な」「私」が語るのに対して、後者では「私的な」「私」が語るのである。それぞれ冒頭の段落を引用しよう。

2008年9月3日東京朝刊6頁 解説面：

記者の目：冤罪の危険性、なお残る取り調べ方法＝川島紘一（鹿児島支局）

◇全面可視化に踏み切るべし — 裁判員制度を機に検証を

鹿児島、富山と相次いだ無罪判決を機に高まった「取り調べの可視化」（録音・録画）問題は、捜査機関が一部可視化することを決め、沈静化したように映る。しかし自由に頼る捜査手法は変わらず、依然、冤罪<sup>えんざい</sup>の可能性は残る。私は「全面可視化に踏み切るべきだ」と考える。警察などの反発は根強いが、裁判員制度という国民総参加の司法制度が始まろうとする今こそ、捜査のあり方を徹底検証し論議する、格好の時期ではないか。

「私は～と考える」と語り手が考えを明確に主張し、さらに「～ではないか」という修辞疑問文で問題を提起する。読み手には、顔写真の主である執筆者が語っていることがはっきりと分かる。

2008年8月11日東京朝刊13頁 家庭面

男の家庭面：体験編 自転車の乗り方を教える＝記者・佐々本浩材

◇バランス取る練習から — 佐々本浩材（41歳・家事検定★）

我が家は子どもが幼稚園の年長組に上がる前に、補助輪を外して自転車の練習をさせることにしている。補助輪なしに慣れたころ、新しい自転車を買って与え、古い自転車には再び補助輪を付ける。3人の娘と息子がほぼ2、3歳刻みのため、最初に乗る自転車は順にお下がりですませようという作戦だ。

「我が家」という語り手を指す指標、また「子ども」、「娘」、「息子」という「私と妻の」という所有形容表現を潜在的に含む指標など、語り手の存在がはっきりと感じられる。ここでは執筆者である語り手自身が記事の主題となっている。「記者の目」の語り手が、自分以外の対象について語るのとは異なる。

しかし語り手の存在が前面に出された言説は、むしろ社外執筆者の書いた投稿や記事に多い。「私」を出さないことが方針とされてきた新聞社の社員の言説としては、最近の戦略を反映したものだと言えよう。また新聞記事は常体で書かれるのが一般的だが、敬体で書かれると、読者に直接語りかける印象を与え、やはり言説としての特徴を出すことになる。例として、『朝日新聞』の夕刊に掲載される新聞批評を見よう。表題に元 NHK 職員である執筆者の名前が入り、顔写真も添えられている。

2008年8月18日夕刊 be 月曜 4面9頁

(池上彰の新聞ななめ読み) 内柴選手の金メダル 再起のシーン、三紙三様

私が新聞のスクラップの楽しさを知ったのは、中学生のときでした。東京五輪開催中に体育の教師が出した宿題が、「オリンピックを伝える新聞の記事を切り抜いて、毎日ノートに張り、感想を書くこと」でした。

冒頭から「私」が自分の体験を、敬体という会話もしくは講演の自然な形で語る。執筆者の写真を見つつ、読者は直接話を聞いているような印象を受けるだろう。このような記事は、新聞において最も言説の極に寄ったテキストであると言える。社員記者よりも、社外執筆者による記事に、語り手が生身の執筆者として読者に訴えかけてくるものが目立つのは、社員が新聞社の一員として共同作業によってテキストを（特に「事実を徹した」「客観的な」記事を、つまり歴史／物語の極に寄ったテキストを）生産することが原則とされているのに対して、社外執筆者は「ゲスト」として協力を求められているからであろう。しかし同時に、新聞社の方針という制約を受けながら個人的な責任を強調される形で記事を書くことは受け入れがたいという気持ちも社員にはあるのではないか。

### 3.4 透明人間としての語り手

物語／歴史の極に近い記事、やや言説／談話に寄った記事、言説／談話の極

に近い記事を見た。今度は、両極の中間に位置する記事を見よう。その中で興味深い特徴を呈するのが、朝刊の1面に掲載されるコラムである。『朝日』は「天声人語」、『読売』は「編集手帖」、『毎日』は「余録」と題され、それぞれ600字から650字、450字から500字、650字から700字程度のテキストを提供する。これらのコラムにおける語り手の位地は特異である。語り手の判断や行動を示す指標が多いが、「私」として名乗ることはない。執筆者は匿名である。新聞の1面のコラムとはこういうものだと割り切っている読み手は違和感なく受け入れるのかもしれない。しかし、位地の定まらぬ語り手が、テキストの中に介入するのは、言説としても特異であるだろう。私は、語り手が透明人間のようにうろつく印象を受ける。「天声人語」と「編集手帖」の最初の段落を例に引こう。

『朝日』2008年9月3日朝刊1頁：

「天声人語」：「福田首相の辞任」

運動会の季節、福田首相の辞任に「棒倒し」が浮かぶ。小沢民主党が揺さぶるのは当たり前だ。だが気がつけば、味方のはずの与党は、棒を守る手を休めている。休めるばかりか、揺さぶりをかける者までいる

1行目は、「『棒倒し』が目浮かぶ」の意味だろう。当然語り手の目に浮かぶのである。「当たり前だ」は語り手の判断である。「気が付く」のは語り手である。

『読売』2008年9月2日<sup>(15)</sup>東京朝刊1頁：

「編集手帳」：「意表をついた福田首相の辞意」

「憲政の父」といわれた尾崎行雄の詠んだ歌がある。〈国よりも党を重んじ党よりも身を重んずる人のむれ哉<sup>かな</sup>〉。1950年（昭和25年）の作という。昨夜、福田首相の突然の辞意表明を聞き、一首を思い浮かべた。

「辞意表明を聞き」、尾崎行雄の歌を「思い浮かべた」のは語り手である。

『毎日』に関しては、福田首相辞意表明を扱った2008年9月3日東京朝刊1頁の「余録」の第1段落から第4段落において、語り手の判断を示す指標はあるが（「ようだ」、「細かな」、「本質を突いて」）、行為すなわちテキストへの介

入を表わす表現は見当たらない。そこで第5段落を取り上げる。

たぶん首相を問い詰めても、先日の小欄でふれたその座右の銘「行蔵は我に存す」—— 出処進退は自分のものとの言葉が返ってくるだけだろう。辞任が政治家として最善の決断と信じたのかもしれない。だが、それを受け止める国民の政治への不信と不安に思いは及ばなかったのか。

語り手としての「私」が問い詰めるつもりなのかどうかは、はっきりしない。「我々記者」かもしれないし「我々国民」かもしれない。いずれにせよ、語り手は無関係で、別の人間だけが問い詰めるのだと解釈するには無理がある。「小欄でふれた」のは明らかに執筆者としての語り手である。「かもしれない」と判断するのも語り手である。また「思いは及ばなかったのか」という問いを発するのも語り手である。

ところで上に引いた「天声人語」の第4段落1行目は「安倍前首相の辞任のとき、小欄は『平沼駿一郎を思い浮かべる』と書いた」となっている。「欄」がものを書くだろうか。「私」が「欄」で書いたのである。言葉尻を捉えるようだが、私はここに重大な問題があると考える。『毎日』の「余録」におけるように、「小欄で書いた」とすることもできないことはない。ただしそれではいかにも主語が抜けているという印象を読者によっては持つだろう。したがってこのような擬人的表現を動員したようである。1面のコラムの語り手は「私」と名乗ってはいけないようである<sup>(16)</sup>。

それはなぜだろうか。匿名で書かれるコラムにおいて<sup>(17)</sup>、「私」という、指示対象の固定しない代名詞はふさわしくないということだろうか。しかしそもそもなぜ匿名でなければならないのか。言説を「あなた」にむけて発しながら、言説の中に介入しながら、「私」として姿を見せない語り手は、あたかも歴史／物語の語り手のようにふるまっている。見えない、ゆえに対象化されないこの主体は権威を形成する。新聞の1面に毎日掲載されるコラムは、その名が読者に新聞名そのものを思い起こさせるべき言説である。ある特定の論説委員である執筆者として語ったのでは、それだけのものとして読まれてしまう。確かに大役を担った執筆者としては、あまり自分の名を強調した形で出たくないという控えめな気持ちもあるかもしれない。というよりも、権威とは、自負と謙虚が対象化を避ける防護壁に守られた中で醸成されるのである。いずれにせ

よ1面のコラムは新聞の格調高い宣伝に利用される。教育やその他の場において、コラムを読むことが奨励され、入学試験の問題文として使われる。新聞社主催の作文コンクールの題材に使われる。過去のコラムは英訳も含めて単行本として出版される<sup>18)</sup>。

コラムの語り手は「私」とは名乗らない。しかし1人称代名詞は用いられる。語り手を含む一般の人々（日本人一般、社会全体）の意味で「私たち」が用いられることがある。また他の人物が語る「私」や「私たち」が引用されることがある。表1は2008年3月24日から9月24日までの3紙のコラムにおける登場件数を示す。

表1

		「朝日」 「天声人語」	「読売」 「編集手帳」	「毎日」 「余録」
私	引用	16	11	8
わたし	引用	4	1	0
私たち	引用	3	2	3
	一般	9	0	14
わたしたち	引用	0	0	1
	一般	0	0	0
我々	引用	1	0	0
	一般	2	0	1
われわれ	引用	1	1	3
	一般	0	0	0

なお、「天声人語」には、上の表には記入していないが、「一般」を意味すると考えられる「私」の特異な用例が1件ある。光市で起きた事件に関連して裁判員制度のことを述べた4月23日のテキストで「『くじ運』次第で、あなたも私も」とある。

およそ半年の期間のコラムに関するものであり、これらの代名詞の出現頻度が各紙20に満たないのであるから、統計的に意味があるかどうかは疑問である。半年分のテキストに対して頻度が少ないような印象も受けるが、そもそも比較の対象として、いかなるコーパスを引いてくるべきなのか決めかねるので、

この課題の検討は次の機会に委ねたい。

このような限定をつけた上で、いくつかの傾向を見ることはできる。「私」／「わたし」に関しては3紙ともに引用が多いことである。また「私たち」／「わたしたち」、「我々」／「われわれ」に関しては、語り手を含めた一般人を意味する用例が「編集手帳」にはないのに対して、「天声人語」そして特に「余録」では多いことである。「私たち」を多用することで読者を自分に引き寄せたいということなのか。『毎日』の場合は、署名入り記事を原則とすることで、読者との距離を縮めようとする戦略が匿名のコラムにも現れているのか。

### 3.5 誰がどこで見ているのか？

報道記事では、語り手はテキストへの介入をできるだけ避ける。他方、記者が語り手として取材体験を語り、意見を述べる記事もある。1面のコラムでは、姿を見せぬ語り手が行動し、評する。ところで歴史／物語の極に近いテキストで、語り手が特異な位地を占める記事がある。

『朝日』2008年9月13日朝刊1頁

「公貧社会」：「支え合いを求めて：税から逃げるサラリーマン」

出勤するサラリーマンですし詰め地下鉄車内。東京都内に住む50歳代の大手商社マンは、不動産投資に関する本を取り出した。「低額物件の複数購入でリスク分散……」。前日の深夜、自宅でネット検索した物件を一つひとつ思い出していく。

1面に掲載された連載記事の冒頭である。語り手はどこにいるのだろうか。取材した記者も一緒に「すし詰め地下鉄車内」にいて、「大手商社マン」を観察しているのか。なぜ彼には商社マンの頭の中がわかるのか。まるで3人称小説における全知全能の語り手のようである。第3段落の後半を引用しよう。

賃料収入の帳簿への記入を子ども2人に手伝わせ、「アルバイト料」として月に8万円ずつ計上。実際には2人の高校の授業料や小遣いだが、年齢などの要件は満たしており、「ルールは守っています」。

商社マンの内面に同化していた3人称の語り手が突然1人称に変わる。「ルー

ルは守っています」は、明らかに取材された者が取材した者に言った言葉である。これ以降、テキストの語りは3人称と1人称の間を交互する。もっとも1人称の語り手が「私」と名乗ったり、テキストに介入することはない。顕在化することなく、あくまでも取材された者の言説の受け手として存在を感じさせるのである。記者がどこでどのような取材をしたのかは読者にはわからない。第3面に続きがあり、2人の執筆者名が記されている。1面だけを読むかぎりそれは分からないし、また2人の分担が示されているわけでもない。執筆者から乖離した3人称の語り手は、全知全能の語り手として、登場人物となった被取材者の内面を読者に見せる。

### 3.6 社説：「私たち」の意見？

社説は新聞社社員の統一見解だとされる。その意味で語り手は1人称複数の「私たち」である。これがいわゆる〈editorial we〉の本来の意味である。「私」という代名詞が、引用でなければ語り手を表わすことは明らかであるのに対して、「私たち」という代名詞は、「私」を含んでいる限り、様々な集合体を意味する。事実、社説における一人称複数の代名詞の指示対象は、大きく分けて、

表 2

		『朝日』	『読売』	『毎日』
私たち	引用	3	1	1
	一般	13	0	11
	語り手	9	0	24
わたしたち	引用	1	0	0
	一般	0	0	0
	語り手	0	0	0
我々	引用	1	0	5
	一般	0	0	2
	語り手	0	0	0
われわれ	引用	3	0	0
	一般	0	0	0?
	語り手	0	0	1?



日本人もしくは社会全体と、新聞社社員特に社説担当社員の二つがある（コラムにおいては「私たち」には前者の意味しかなかった）。表2は、2008年3月24日から9月24日までの社説で用いられた「私たち／わたしたち」および「我々／われわれ」の内容の区分である。

『毎日』において語り手を指す用法が多い。本文を読めば、そのうち9件は「主張する」という動詞、5件は「指摘する」という動詞、3件は「求める」という動詞と結び付いていることが分かる。まさに語り手の意見表明という社説の位地を示している。これは上で述べた、執筆者の存在を強く打ち出す『毎日』の戦略を反映していると考えられる。

『朝日』では、当該の本文において語り手を表わす1人称複数代名詞に特定の動詞との結び付きは見られない。また語り手を表わす例が4月7日以前に集中しているのが特徴である。これはこの日を最終回とする「希望社会への提言」と題する社説が連載されていたことと関連しているようである。社説において憲法や参議院などの問題に関して、未来に向けて具体的な提言を行なうという企画であり、これに該当する社説ばかりでなく、該当しない社説においても、語り手である「私たち」が名乗って主張をする傾向が生じたと考えられる。ただしその連載が終わってしまうと、社説の語り手である「私たち」が引っ込んでしまった印象は免れない。

また『朝日』と『読売』両紙において、「我々」および「われわれ」という表現が主に引用において用いられている。「私たち」および「わたしたち」に比べて、これらの表現はいかつい印象を与える。言うまでもなく、活字メディアにおいて、口頭の発話の引用が文字通りであることはまれであり、普通は引用者の判断で短縮されたり、表現が換えられたりする<sup>(19)</sup>。したがって実際に引用された言説を発した人間が「我々／われわれ」という表現を用いたかどうかは定かではない。政治家の発言からの引用が『毎日』の場合4件、『朝日』の場合は3件であり、いかにも権力者の言説といった印象を与える。

1人称複数の代名詞は、「私」と他の誰かを指す。そのため、他の誰かがはっきりしないと、「私たち」の意味もはっきりしない。『毎日』の、日本女子ソフトボール・オリンピック優勝に関する社説（8月23日）には、「今回の日本の『悲願の金メダル』が、ことさらにわれわれの胸を打つのは、別の事情もある」とある。これは読者を含んだ一般の人としての「われわれ」なのか、語り手のことなのか、はっきりしない（上の表では、語り手に一応入れてある）。ある

いは『朝日』の道路特定財源に関する社説(3月28日)に、「民主党などにとっては、廃止を主張してきたガソリン暫定税率の取り扱いが明確でない点などが不満だろう。日銀総裁人事と同様、期限切れ直前の提案だ。なぜもっと早く打ち出せなかったのか。私たちもそんな思いを禁じ得ない」とある。「私たち」とは語り手を指すと考えられるが、一般の人の可能性も排除できない。さらに4月7日の『憲法25条』を再定義しようでは、「希望がかすむいま、改めて25条の精神が私たちに問いかけてくる。(132文字省略)私たちが積み重ねてきた提言は、突き詰めればそういうことだ。(111文字省略)私たち一人ひとりも、よく考える必要がある。子どもや孫の成長を楽しむように、その世代のために希望を残すことを大きな楽しみとしたい」。最初の「私たち」は一般の人々、2番目のものは「語り手」3番目のものは一般の人々を指すと考えられ、「私たち」の意味がめまぐるしく変わる。このように「私たちが」両義性を帯びたり、頻繁に意味を変えると、読者は、社説の語り手に知らず知らずのうちに引き込まれてしまうのではないか。ことによるとそれが、新聞社の社員によって戦略として用いられてはいないだろうか。

『読売』においては、1人称複数形の代名詞の出現が極端に少ない。1件だけ、それも引用である。語り手が名乗り出ることがないのである。しかし語り手がその存在を感じさせないというのではない。2008年9月2日の社説<sup>(20)</sup>の冒頭を見よう。

#### 福田首相退陣 政策遂行へ強力な体制を作れ

日本の最高リーダーが、またも、突然、政権の座から降りた。異常な事態である。

自民党は、新たな総裁を早期に選び、後継首相の下、政治空白を最小限にとどめなければならない。

表題の「作れ」とは語り手が発した命令であり、「突然」「異常な」および「とどめなければならない」は語り手の判断である。『読売』には、全体的に署名入り記事が少ない。『毎日』が署名入り記事を原則としているのと対照を成す。語り手の存在を前に出さない方針もしくは傾向が、社説における人称代名詞の使い方にも現れているのか。もともとこのような方針は、日本の新聞社一般において伝統的に採られていたものであり、保守的な価値観を掲げる『読売』

がそれにまだ依っているのか。渡辺恒雄の影響力の強いこの新聞社において、個々の社員が語り手として言説を引き受けることに困難があるのか。

ところで社説は新聞社社員の統一意見とされるものの、社員が様々な意見をもっている以上、時には社説の代表性が疑わしくなることがある。2008年の1月から4月にかけて『日本経済』、『朝日』、『読売』が年金制度の改革案を紙面で提案した。『日本経済』と『読売』が報道面で案を示したのに対して、『朝日』は社説で示した。こうした提言に関して報道の中立性という観点から批判が生じたとのことである<sup>(21)</sup>。『朝日』では、これに関して大軒由敬論説副主幹が「連載社説『希望社会への提言』の一環で自社案を示した。編集部門と連携したわけではなく、論説委員室単独でまとめたものだ」と述べている<sup>(22)</sup>。これは社説が常に新聞社を代表する意見表明の場ではないということを表わしている。

### 3.7 誰が叫んでいるのか：見出しの場合

最後に最も声の大きい、それでいて最も捉えにくい語り手を扱おう。見出しの語り手である。言うまでもなく記事の表題として添えられる。しかし記事の内容を端的に伝えるばかりでなく、読み手を引き付けることを目的とするので、記事から遊離したようなレイアウトで目に飛び込んでくるものも多い。実際、読者としては自分の抱く関心や手持ちの時間に応じて見出ししか読まないこともあるだろう。このような、本文から独立することもある（勿論常にそうだとは限らない）見出しは、誰が語っているのか。見出しは、本文の執筆者とは別の、レイアウトや編集に携わる記者がつけることが多い。しかしあくまでも本文の前につくものである。他方、本文の内容を象徴すると考えられる引用が見出しとなることも多い。その意味でも、見出しの語り手は執筆者から遊離した特殊な主体であると言える。9月2日の1ページのトップ見出しは、『朝日』が「福田首相辞任 2代続け政権放棄 後継選び、麻生氏軸 国会運営、展望開けず」、『読売』が「福田首相退陣 政権浮揚、展望開けず 総裁選に麻生氏出馬へ＝号外も発行」、『毎日』が「福田首相：退陣表明、緊急会見『新布陣で政策実現を』 後継、麻生氏が軸」となっており、歴史／物語の極に近いテキストである。それに対して社会面のトップ見出しは、『朝日』が「いい加減にしてよ 選挙か、準備急ぐ議員ら 福田首相辞任」(30頁)、「また突然投げ出し有権者『裏切られた』 景気下向き、課題山積 福田首相辞任」(31頁)、『読売』が「福田首相辞任 読売新聞社が号外 2万7000部を発行」(30頁)、「突

然の幕、福田首相淡々 在任1年『新しい人に』『なぜ今』国民驚き(31頁)、『毎日』が「福田首相：退陣表明 市民『また』『無責任』 怒り、あきれ声 列島各地に衝撃」(26頁)「福田首相：退陣表明 唐突な幕引き18分 会見、にじむ疲労」(27頁)となっている<sup>(23)</sup>。いずれも1人称の語り手による言説という印象を与える。

ただし『読売』の「新しい人に」、「なぜ、いま」や『毎日』の「また」と「無責任」が引用であると示されているのに対して、『朝日』の場合は、「いい加減にしてよ」が語り手の言葉なのか引用なのかよく分からない。本文を読むと、自民党富山県連の鹿熊正一幹事長の「いい加減にしてよという感じ」という発言が引用されていることが分かる。また「裏切られた」という「有権者」がタクシー運転手だと言うことも分かる。それに対して『読売』の「新しい人」は首相の発言の中に現れる。「なぜ今」に関しては、「今なぜ辞めなければならないのか」という出所不明の発言が前文に現れ、本文には「今から国会が始まろうとしているのになぜなのか。」という言葉がタクシー運転手のものとして引用されている。『毎日』では「また」や「無責任」が「市民たち」の言葉として前文で紹介された後に本文で、会社員、政治家や評論家の言葉として引かれている。新聞記者により、様々な場所で尋ねられた人々は、様々な答え方をしたはずである。発言の趣旨を捉えた上で、いかにも口語調に構成して「引用」として記事に入れるのは、活字メディアの言説で一般的に行なわれる。しかしそうした複数の発言が一つの「市民の声」にまとめられ、さらに見出しとして使われた場合、その発話主体は誰なのか。大文字の「市民」、それは権力を帯びた存在ではないのか。

#### 4. 新聞の語り手、マス・メディアの語り手

これまで見てきたように、語り手の存在がどれほど感じられるかは、記事の種類により様々である。報道記事では語り手が極力己の存在を隠して「客観性」をめざす。このような記事においては書いてある内容があたかも「事実そのまま」であるかの印象を与える。「引用」された「市民の声」は、あたかもその人がその通りに語っているかのように思わせる。社員が書いた意見記事や社外執筆者が依頼されて書いた記事などと明確な区別をされるほど、この幻想は強くなる。3人称(あるいはむしろ無人称)で語る報道記事の語り手は、その存

在が普段読者に意識されないがゆえに、対象化されにくく、従って読者に影響を与えやすい。執筆者が明らかな意見記事では、語り手はその存在を読者にはっきりと表わす。従って読者により対象化されやすいとも言える。しかしいわば無人称の語り手による報道記事を背景にした意見記事は、あたかも「客観的事実」に基づいた「論理的」もしくは「共感できる」意見だという印象を与えるかもしれない。これは新聞社の社員の、意識するにせよ、しないにせよ一つの戦略ではないだろうか。これに社説という匿名で複数の語り手による意見記事や、「天声人語」、「編集手帳」、「余録」という、匿名の語り手によるコラムが加わる。「事実報道」を背景にした、匿名の語り手による言説はまた、執筆者が直接具現した語り手による言説と異なり、対象化しにくい「意見」や「感性」を読者に投げかける。投稿や投書は新聞から独立した語り手により語られるだろうか。確かにこれらは、社員による記事とは定義上異なる言説である。しかし編集担当の社員による選択が行なわれる以上、また執筆者が日頃その新聞の記事に何らかの影響を受けていると考えられる以上、読者は投稿や投書もその新聞の言説の一部を構成すると考える傾向がある。新聞の傾向に反する論調の投書が掲載されることにより新聞の語りの多声が形成されることもあるが、このことが新聞の懐の深さを表わす戦略として使われることにもなる。こうして新聞という寄り合い所帯の語り手、複数であり、また単数へと凝集し、抽象化した語り手が読者に語る。

新聞の語り手は独立してあるわけではない。人々は、ラジオやテレビの言説を聞き、電車内や街中、インターネットにおける様々な言説に接する。様々なメディアで扱われる問題に関しては、人々は往々にして、どのメディアにおいて何がどのように語られたかを区別して憶えていない。「マスコミが言った」、「ネットにあった」ことになり、それが「世間が許さない」こととなる。かくして誰でもない「誰か」である「世人」(ハイデッガー)が語る。いやむしろそれが語っている (ça parle)。かくして主体 S に斜線が引かれ、大文字の他者が君臨する (ラカン)。

## 5. 結 論

以上、私は、バンヴェニストやジュネットの語りに関する理論を拠り所として、日本の3日刊紙のテキストにおける語り手の問題に関して考えた。語り手

の位地によりテキストを歴史／物語と言説／談話に分けた場合、現在性を伝えるメディアのテキストはすべて言説である。その上で、伝統的な「事実」報道記事は歴史の極を志向し、意見記事は言説の極に近づく。またその間に様々な記事が位置する。こうした記事の差異化は新聞社の社員の意識的な戦略に基づくものでありながら、その意図を超えた効果を持つ。新聞の様々な言説は全体化して一つの語り手を形成し、マス・メディアさらには世論の主体性なき主体、つかみ所のないまなざし、語りの生産に貢献する。

このような状況において、我々は、言説を受け取った時、語り手が誰であるかに留意する必要がある。語り手を支えている執筆者、発言者、さらには彼らに直接もしくは間接に指示を与えている者は誰なのか、いかなる状況において彼らは言説を発するに至ったのかを考えることである。社員記者が記事を書いているのか、論説委員がコラムを書いているのか、読者が投書してきたのか、代理店の社員が広告を書いているのか、リポーターがディレクターの指示に基づき語っているのか、テレビ局に視聴者が警察を非難する電話を掛けてきたのか……往々にしてそれは明らかではない。我々は常にそれを調べる手段や暇を持ち合わせているわけではない。しかし語り手が誰だか分からないならば、分からないことを意識することは無意味ではない。疑うきっかけを失わないことは重要である。「世間様」が暴走しないためにも。

最後に今後の課題を述べておこう。これまで私は日本のメディアに対象を限定してきた。今後は、異なった社会状況において異なった言語を媒介とする外国のメディア言説との比較も射程に入れたい。また今回は特定の日の特定の主題に関する社説を、今回は広汎に選んだ最近のテキストを典型例として分析の対象とした。日々生産されるテキストの一般的な傾向を捉えるには、膨大な量を統計的に処理する必要もあるかもしれない。ただし統計は、数値化できない部分を切り捨てることになる。言説の分析について廻るこのジレンマをどう解決するかは、この分野における大きな課題である。

#### 《注》

- (1) 「戦略としてのテキスト：ディスクール——日本の4全国紙の社説」『言語と文化』第4号、2007、pp.43-63.
- (2) 「まなざしとしてのマス・メディア——対象化はアポリアか?——」、『言語と文化』第5号、2008、pp.37-58.

- (3) Cf. 「あらたにす」 <http://allatany.jp>
- (4) 「戦略としてのテキスト」において私は「発話者」という表現を用いた。本論では、より書かれたテキストになじむ「語り手」という表現を用いる。
- (5) Cf. Émile Benveniste, *Problème de linguistique générale, I*, Gallimard, 1966, coll. «Tel», pp. 237-245. 尚、「戦略としてのテキスト」において私は、〈discours〉という単語を「ディスクール」と訳（むしろ転写）した。本論では「歴史／物語」〈histoire〉との対照を不十分ながらも含み得ると同時に、日本語として簡潔である「言説／談話」という訳語を用いる。それぞれ二つの訳語を重ねざるをえないことそれ自身が訳語としての不十分さを示しているが、文脈に応じて「歴史」もしくは「物語」、「言説」もしくは「談話」のどちらかのみを使うこともある。
- (6) prospectif : «il allait partir», «il devait tomber» など、未来形の代わりに用いられる、半助動詞を伴った迂言法をバンヴェニストはこのように称している。 Cf. Émile Benveniste, *op. cit.*, p. 239.
- (7) *Ibid.*, p. 242.
- (8) Cf. Gérard Genette, *Figures II*, Seuil, 1969, coll. «Points», p. 63.
- (9) *Ibid.*, p. 65.
- (10) *Ibid.*, p. 66.
- (11) *Ibid.*, pp. 65-66.
- (12) Émile Benveniste, *op. cit.*, p. 241.
- (13) 印刷媒体の第 13 版では見出しが「混迷打開の決断」となっている。
- (14) このような傾向が、発行部数で『朝日』や『読売』に劣り、また政治的立場が似ている『朝日』との差異化を図りたい『毎日新聞』で顕著なのは興味深い。
- (15) 印刷媒体第 13 版では、9 月 2 日の「編集手帳」は韓国で逮捕・起訴された北朝鮮の女スパイを扱っている。
- (16) 週刊誌では社員記者の書いた記事において「小誌が」という表現が用いられ、語り手が、「私」と名乗ることはまずない。
- (17) 実は、コラムの執筆者の正体は「極秘」ではない。「天声人語」や「余録」の執筆者は、交代の際に新任者の名前が告げられる。また「編集手帳」の執筆者は折りに触れて紹介される。しかし日々のコラムにおいては名前が発表されず、ゆえに多くの読者は執筆者の名前を知らない。
- (18) 「天声人語」は朝日新聞出版より、英訳は『ベスト・オブ・天声人語』と題して講談社（「講談社バイリンガル・ブックス」）より、「編集手帳」は中央公論社（「中公新書ラクレ」）より出ている。
- (19) その意味で、もし途中カットなしの音声動画記録との対照が可能であれば、活字メディアにおける引用内の言い換えや短縮、さらには引用全体の再構成が、語り手の判断や介入を示す指標となる。
- (20) 紙媒体の第 13 版においては、この日の社説は来年度予算に関するもの、パキスタン支援に関するものの 2 件である。
- (21) Cf. 『朝日新聞』2008 年 6 月 3 日朝刊 29 面、太田啓之、中村靖三郎「メディア・タイムズ」。
- (22) 同書。

- (23) 各紙の紙媒体第 13 版において、言うまでもなく見出しは縦横様々な大きさの活字により表わされており、インターネット版では編集者が主なものと判断した見出しをトップとして直列している。また煩雑になるので具体的に指摘するのは控えるが、紙媒体とインターネット版の間には異なる部分がかかなりある。

(フランス文学／思想・国際文化学部教授)